

---

# 雨の日には微笑みを

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雨の日には微笑みを

### 【Zコード】

Z8422D

### 【作者名】

三条司

### 【あらすじ】

目的がない。だけど、それに何の感情も喚起されない。何が欲しいのか、わからない。でも、それに不自由も感じない。当たり前の高校生活が続く。当たり前の生活、当たり前の自分。だけど、あこの出会いって変わった。変わった。きっと、もう大丈夫。

(前書き)

結構昔に書いたものですが…。 楽しんでいただければ幸い。

毎朝、といつほどどの頻度でもない頻度で思うことがある。「の、鬱陶しいほどに単調な自分の生活が激変してしまえば良いのに、と。そのためなら、戦争なんてのも悪くないかもしないな。そういうことが不謹慎なのも承知の上で、そういうふうに思つたりする」とある。

実際には、生活は単調なだけでは飽きたらずに、その退屈さを積み重ねていくようだつた。これが貯金なら、どんなに自分の生活は経済的に潤つていただろうか。

起床して着替えて階下に降りる。母親の作ってくれる朝食を無感動に胃におさめて、学校へ。授業を諾々と受け入れて、放課後は塾へ。ここでもノートを取つたりしながら時間をつぶして、夜は十時頃帰宅。部屋に運ばれる夕食を食べながら、また勉強をして就寝。ハンドレスに行われる毎日。

ハンドレス、か。

思つて微苦笑した。本当に、終わりなど果たしていつやつてくるのか。

**国河健嗣**はいわゆる高校生だつた。その性格に驚くほど特殊なことも、その素性や歴史に驚くほど突飛なところもない、『ぐぐぐ普通の男子高校生。

勉強しなさいという親の声を、そんなものかと聞いて、無事に第一志望校に合格した。さてこれからどうするのかな、とほんやり他人事のように自分事を考えている間に夏休みは過ぎ去つて、気が付けば十月にならうとしていた。

何もしていないのに、時間だけは過ぎていくんだな。

その日、台風の影響とかで学校が早く終わった。塾までの時間、どこで何をしたいという願いもなく帰路についた。

「ただいまー」

リビングでテレビを見てこらしー母親がのんびりとした口調でおかえりと返事を返す。冷蔵庫から冷えた牛乳を飲もうと台所に行って、グラスに白い液体を注ぐ。片手にグラスを持ち、もう片方にかばんを持って、二階の自分の部屋へ。塾の時間まであと二時間弱ある。良いのか悪いのか。嬉しいのかがっかりしているのか。自分にすらわからないそれは、他人にとつてはきっと一生理解不能。

グラスを持つた方の腕を使ってドアノブを下げる、足を使ってドアを押し開ける。

見慣れた筈のその部屋は、今は、あえて一言で形容しようとすると、まるで水槽の中のようになっていた。

「は？」

乾いた声が自分のものだと気付く。部屋を見回す。碧とも青ともつかない色の液体で満たされた部屋にふわふわと漂っているのは、筆記用具に枕に教科書に漫画に今日の朝急いで脱ぎ散らかしたままのパジャマ。

部屋は何故だか水で埋め尽くされていた。

そして、不思議なことにその水、もしくは水らしきもの、は彼の部屋からは出ようとしない。ドアと廊下との境目でぼんやりと揺れ動く、ただそれだけだった。そこが世界の境界線であるかのようだ。

「何だ、これ…」

誰にともなく咳いて、もう一度部屋を見回して、それに気が付いた。

誰か、いる。

ベッドにカジュアルに寝転がっているそれは、ふいにむくりとその上半身を起こした。目が合つ。

綺麗な瞳の女の子だった。その色を、どこかで見たことがある。湖だ。テレビで見た。北欧かどこかの、雪に囲まれた静謐な湖。あれと同じ色をしている。彼女の顔立ちは人間のそれと同じだったし、腕も足も二つある。ただ圧倒的に人間と違っていたのは、その肌だ。透きとおる緑色をしていた。あともう少し透きとおついたら、肌をすり抜けてその後ろの壁が見えるだろうな。

「おかえんなさい」

その生き物は、海底のよじこみらむらとみられる部屋の丑でやう言つた。親しみやすいような、それでいて異質だと感じぬ顔。

「入んなよ。ここはキミの部屋なんでしょう?」

震える。　　言つて、ふふふと笑つた。笑うと、彼女の周りがゅらりゅらりと

言われるがままに部屋に入った。でも怖くて、目をつぶった。冷たさも濡れる感覚も何もないまま、数歩歩いた。まだ目はつぶつたままだ。ふと気配を感じて、反射的に目を開ける。

「大丈夫？ こわいの？」

両手をだらりと横にたらして、彼女が田の前に立っていた。ひとのものではありえない肌が眼前に、秒ごとに色を微妙に変える瞳が彼を見つめていた。

「あんた、誰だよ

「わからないの」

そう言つて、寂しげにも取れる微笑みを彼女は浮かべた。

「わからないうつて……」

「ボクが誰だか、どこから來たのか、一体ぜんたいどうしてこんなことになつちゃつてゐるのか、部屋が水浸になつかけやうじやないかとか、どうして水の中なのに普通に会話出来て呼吸が出来るのか、ボクは何の為にここにいるのか、そういうのが知りたいんでしょう? 知らないよ。ボクは何も知らない。教えてあげられないよ」

するするとまるで台本を読むように彼女が話すのを、健嗣はただ見つめていた。そして気付く。そういえば、そうだ。会話も呼吸も自然に出来ている。何故だ? いや、その答えはあげられないと、もうすでに釘をさされてしまつていてのだったか。

傍目から見れば呆然とも取れる立ち方をした健嗣の傍をそつと通り抜けて、彼女はドアの方へと向かった。

出て行く気か? そう思つた瞬間、頭の中を色々なシーンがよぎつていいく。呆気にとられて、ややしてから叫び出す母親。駆けつける警察。連行される彼女。立ち去る自分。さつきみたいに優しく寂しく微笑む彼女。

「出て行くな」

思わず声を荒げた。それに驚く風でもなく彼女は振り返り、後ろ手にドアを閉める。ぱたん、と乾いた音がする。日常に組み込まれた、聞き慣れた音。少しばかり目を細めて彼女が、

「出でいかないよ」

日常と非常とを分け隔てて、微笑んだ。

迷子のこねこちゃん。そんな童謡があつた気がする。どこから来たのか、何のためにここにいるのか、自分が一体何者なのか。そういうのは一切判らないという水棲種のよつな、言語を解する少女。

つべづべ変な状況だ。

教科書の一ページ一ページを興味深げにめくつてはながめ、逆さにしては斜めにして遊んでこいる少女をベッドの上から眺めて、健嗣は嘆息した。

「あんた、名前は？」  
「なんでも」  
「なんでも？」  
「キミの好きなよつに呼ぶと良い。何が良いかな？」  
「は。あんた、ペツトか何かなのかよ」  
「ペツト、ペツト……。ああ、犬と猫が一番有名なやつだ」  
「有名、うん、まあ有名なちやあ有名か。どつちかつて、うとい、そつこいのはポピュラーっていうんじゃないの」  
「ポピュラー、ね。うん。どちらでも良い。なまえ、どつする？」  
「そんなこと急に言われたって……」  
「困る。

そこで会話が途切れてしまった。

異様だ。変だ。おかしい。頭の中で自分が叫んでいる。こわい。こんなのはり得ない。起こる筈がない。夢に決まってる。そう叫んでる。でも、それと同じくらいわくわくしている自分がいる。そうか。わくわくか。そんな気持ち、随分と味わっていなかつた気がする。誰にも言えないような非日常。現実には起こりえない今の状況。そういうのをどこかで切望していたのは、自分ではなかつたか。そ

う気付いたとき、ふと笑みがこぼれた。そしてそれを敏感に彼女は察知する。

「うれしいの？」

「そうだな、ちょっと嬉しい」

ふふ、とくすぐったいような声で笑うと、彼女はまた一人遊びに興じ始めた。かと思うと、すっと時計を指さす。

「じゅく、でしょう？」

「え？ あ、ほんとだ」

残念。タイムオーバー。ホイッスルの音が鳴り響く。塾の時間だ。塾の時間だなんて何でこいつわかつたんだろう。まあいいか。のろのろと用意をしながら、行きたくないなと思った。思う自分に驚いた。新鮮だ。

塾用の教科書だの参考書だのを詰め込んだ鞄を肩にひっかけて、ドアを開ける直前に振り返る。カーペットの上にふんわりと座り込んだままの彼女が健嗣を見上げていた。

「じゃ、また」

「うん。行つてらっしゃ」

彼女が右手を擧げる。周りの水が呼応するよつに揺れた。

ドアを閉めて廊下を歩きながら、一人「じゅく」。「行つてらっしゃい、だらつ」そしてまた、肩をすくめて笑った。

時間が人に平等に流れているなんて、嘘つぱちだ。

早く授業が終われば良いと、何度も願つたかわからぬ。いつも以上に集中力に欠けた授業態度で、終わるやいなや塾を飛び出した。

歩く速度はどんどん増していくって、帰宅する匂いが息はあがっていた。

「母さん、今日は夕食いらないや。疲れてるみたい。おやすみ」  
母親が何か言つていたようだが、所詮バックグラウンドだ。もつれ  
そうになる足を一階に運んで、ドアを開けようとして何故だか躊躇  
した。

「こ」を開けて、彼女がいなかつたら、本当に夢だつたら、また、  
あの単調な生活に戻るのだとしたら？

ドアノブに触れたまま、そんな予感が全身を駆け巡る。先程と同  
じように、目を堅くつぶつて一気にドアを開けた。

「おかえんなさい」

「まつ」とした。泣きたくなつた。何故かはわからない。ただ、無性  
に安心した。

「ただいま」

水の中で涙をこぼしたら、彼女は気付くのかな。それとも、すべて  
一緒になつてしまつてわからないのかな。

生活が激変すれば、何かがとんでもなくおかしくなれば、もつと  
いへ、もつと……。

教室の窓からぞぞく雲の群れがたなびいていく様を何とはなしに  
見つめながら、健嗣は自問自答した。もつと、どうなると思つてい  
たのだろう。生活と同じように単調な自分も、激変すると思つてい  
たのだろうか。

あれから一週間が経つた。自分で驚く程に奇妙な水槽のような部屋での生活にも慣れた。だけど傍から見ている分には、健嗣の生活は以前とまったく同じだと思つ。ただ変わったのは学校からいつもよりも早く帰宅するようになったこと。塾に行く前の数時間は部屋で過ごすようになったことくらいか。母親には勉強に集中したいからという理由で、夕食を部屋の外に置いてもらつことにした。もとより母親は、整理整頓だけは昔から得意な健嗣の部屋に無断で入るような性格ではない。

案外、非日常とやらは日常に上手く溶け込めるように作られているかもしねれない。

彼女はまだ部屋に住み着いている。一人遊びに興じては会話をす。見ていて退屈しなかった。感情によつてその肌が透明度を変える様や、窓から差し込む夕日や朝日によつて色味を変えるその瞳を飽かずにつめた。

名前を。そう何度も訴える彼女に根負けして、名前を付けた。いざつけようとしたら、案外に頭を使うものなんだなと思った。一日間、図書館に休み時間に通つたりして、自分なりに考えてみた。

彼女はどこから来たのか判らないという。だけれど、彼女にはコミュニケーション能力も言語も、最低限のマナーのようなものすら身に付いていて、まるで誰かにそう育てられたようにも思えた。置き土産。忘れ形見。そんな言葉が頭に浮かんだ。フランス語の土産は、Souvenir。これには、英語でいうところのRemember、という意味も含まれているらしい。その土地を、その人たちを覚えておくための土産もの、か。帰ってきてその話をした。スベニア。何度もその発音を繰り返す彼女は、やがてその瞳を深海

の色に染めて、それが良いと言った。今は短縮してスー、と呼んでいる。

実に短絡的だ。

スーは決して部屋から出ようとはしなかつた。出でては行けない気がするらしいのだ。こういった感覚的な抽象的なことをスーはよく口にする。それに対して、そんなものかと健嗣は特別視するでなく聞いていた。

「ねえ。あはなに？」

煌々と最後の光を放つ夕陽を指をして、スーが唐突に尋ねた。今までじつと太陽を見つめているところを何回か目撃しているから、てっきり好きなのかと思っていた。そう告げると、

「好きと知つていろは別ものだよ」

成る程。

「あはは太陽だよ」

「たいよう？」

「ここ、おれたちが住んでいるこの惑星からずっととずっと離れたところにあるんだ。燃え続けているんだ。そして、その光がここまで届いている」

「そう。燃えているんだ」

「うん」

「あつたかい？」

健嗣はそのまじめくさったスーの顔を見て少し顔をほころばすと、「あつたかいっていうより、熱いんじゃないの？近付いたら、死んじようよ」

「そう。死んじようの」

「うん」

「誰でも？」

「いまのところ、誰でも

「こわいね」

ぽつりとスーが呟いた。その顔があまりにも真剣だったので、健嗣はこちらも真顔になつて、

「でも、太陽がなくなつたら、地球は暗闇に飲み込まれて、それこそみんな死んじようよ。何も見えない、何の食物も育たない。暗黒世界、つてやつだ」

「やつぱり」静かに息を吸い込むと、「こわいね」言つた。

「だな」

そして沈黙が訪れる。

スーとの会話はいつもこんな風だつた。健嗣は口数が多い方ではない。スーがふいに話しかけてくる、それに健嗣が応じる。そして、会話はいつも心地好い沈黙に落ちていく。ゆらゆらと。

「ねえ。さわれないかな」

「え？」

「たいよつに、さわれないかな」

「無理だよ。言つたら？死んじようよ」

「そうか。じゃあ、ここから手を出しても良いかな」

「窓から？そんなことして大丈夫なのか」

「わからない。でも、わからないからやつてみないとわからない」

「何だよそれ、早口ことばみたいだな」

からかうように微笑んでから、健嗣は机から身を起し、窓辺に近寄つた。スーが何も言わずに彼の傍に身を寄せる。

うつかり声をかけるのもばかれるほどに熱のこもつた瞳をその窓の向こうにむけて、スーはそつとその手を開いた窓の外へと差し出した。

「いたい！」

小さく、それでも悲痛な声をあげてスーがその手をすぐにひっこ

めた。見れば、薄緑色のその手の甲はまるでマグマの溶岩のよつて水ぶくれでいつぱいになつていた。

「お、おい、大丈夫か」

慌てて健嗣がその手にさわらつとすると、やんわりとじだがきつぱりと、その手をさわらせまいと自分の方に引き寄せるが、何でもなれやうに微笑んだ。スーは触れたり触れられたりするのを好まない。

「だめみたい。ね」

「あ、ああ…。でも、その手…」

尚も杞憂に顔を曇らせる健嗣に穏やかに朗らかに笑いかけると、スーはことさら明るい声音で、

「死んじやわなくてよかつたね」

言った。

天気予報がここ数日降つては止み、止んでは降り続ける雨は今晩をもつてピークに達しそうだと告げたのは、あの夕陽の日からちょうど一週間と一日過ぎたときのことだった。

「死んじやわなくてよかつたね」

あの言葉。あの笑み。あの手の甲。夕陽。

そんなものを順繰りに飽きることなく健嗣の脳みそはリピート再生し続ける。返す言葉が見つからなかつた。返す顔を思いつかなかつた。夕陽を見つめるたびに、自分の手をかざしてみる。その手を通して見える、自分の血管を不思議な面持ちで見つめたりした。どうしておれのは平氣なんだろう。何で緑色じやないんだろう。何で太陽のもとを歩いていても平氣なんだろう。自分の価値観なんて、

所詮そんなものだ。少しの比較で、根底からぐらぐらしてしまつ。そういう、芯のない人間が自分なんだろう。ただ、違つてゐるのは、そんなことに今まで気にもとめなかつたこと。スーが自分に何らかの刺激を与えているのは、明白だつた。

水底のような自分の部屋の床を見るのにも慣れた。少し乱暴にものを投げ置けば、それがゆらゆらと部屋を漂つことも慣れた。順応能力は、おそろしいものだ。妙に客観的にそう思う。

「あ、また。あめだ」

ベッドに両膝をおいて、窓辺に両肘をおいて、白昼夢でも見るかのようないゆう口調でスーが外をさした。言葉通り、雨はまたもや天から降り注いで、さらさらと涼しげな音をたてて窓をなでていく。

「今晩がピークらしいぞ」

「ピーク?」

「ああ。えつと、今日の雨が最近で一番激しくなるらしく」

「らしい?」

「つて、天気予報士が言つてた」

「そのひとは、ずっと空を見てるの? 外を見てるの?」

「うーん。そう、かもな」

「ボクみたい」

言つてから、例のふふふと周りを震わす笑みを浮かべる。いつにもましてその透明度を増しているその華奢な腕をもたげて、人差し指で自分をさして、てんきよほつし、とゆっくり呟いた。

「うん。スーは、この部屋の天気予報士だな」

優しく言いながら、予報はしないから厳密には天気報告士かな、などと下らないことに思いを馳せる。

机の上の電子時計はまもなく真夜中だと告げている。一、二時間

前に帰宅した父親も、そろそろ就寝するころだらう。ふと窓に目をやれば、雨足は強くなるばかりで、そのリズムとともにスーが小さな声でメロディーを口ずさんでいた。

「スー」

何気なく言つたつもりが案外に掠れた自分自身の声で、健嗣はぎょつとした。そして急に心臓の音を身近に聞く。

「なんだい」

スーが窓辺からこちらに振り返る。あどけない顔。健嗣のいふとこからでは見えないその手の甲には、あの日の火傷の痛みはまだあるのだろうかと思いながら、

「出てみるか」

「でる? どこにだい?」

「外にだ」

ずっと考えていたことだつた。太陽にあんな風に触れただけで火傷を起こすのなら、反対に土砂降りの日ならもしかして平気なかもしれない。充分な水さえあれば、スーは外に出られるのかもしない。単純で幼稚だと言われてしまえばそれまでの論理。それでも、それが真実のように思えて仕方がなかつた。内心、梅雨の時期でもないのに降り続ける雨をながめて、これはチャンスだらうと思つたりもした。外に出て、何かがあるわけじゃない。何かが劇的に変わらわけじゃない。でも、本当に?

「そと。……そと?」

言葉を反復して、窓の先の暗闇を見つめてからもう一度言葉を口にして、そしてつぼみが花開くようにゆっくりと微笑んだ。

「行く」

行くのは良い。行こうと考えたのは良い。問題は、どうやって、だ。

あれやこれやと頭をひねって、結局一階の自分の部屋から出るに至った。その方が少しでもスーは水に触れていられる。玄関から出れば、それまでの間にスーの肌が炎症を起こす可能性があった。出来るだけリスクは避けたい。

窓を開けると意外に強い風がカーテンを揺らして、招かれたように雨のしづくが部屋の中に入ってくる。それは部屋の中の水にはじめは混じり合わずに球となって侵入してきて、そのうちに部屋の水ととけこんでいった。ということはスーは外の水に拒絶反応は起こらないはずだ。窓邊におかれたベッドの足に押し入れから発掘した登山用のロープをくくりつけて、端を地面へとたらす。

「おいで」

健嗣が差し伸べる手にスーが怪訝な顔つきで近付いていく。

「なんだい？」

「おぶつてつてやる」

「ははあ」

何だよそれ、と苦笑しながら健嗣が背中を指さすと、スーは大人しくそこに体を預けた。体温というもののまったく感じられないその体は、華奢な体躯から容易に想像出来るように羽のような軽さだった。まったくもって、人間ではありえない。当たり前のその事実にいま一度直視せざるをえなくなつて、健嗣はふと寂しいような嬉しいような気になつた。

「しつかりつかまつてろよ」

用心して小声でそうは言つたものの、雨はもはや豪雨となつていい

て、多少の物音がしたところで両親が飛び起きたと思えない。ぎゅっとスーが肩を強く掴む、その感覚を痛いほどに感じながら、ゆっくりと健嗣はその体をロープづたいに階下へと地面へとおろしていく。開け放たれた窓をじうやつて閉めれば良いか、上手く算段はつかないまま一人の体は濡れそぼる芝生の上へと落ち着く。

「スー。大丈夫か」

生きているか。

メロディラマか感動のサバイバル映画か、普段なら口にしないような言葉を健嗣は口にしそうになつた。生きているか。それだけは、こわくて聞けなかつた。

「うん。へいきだよ」

背後から声が聞こえてくる。聞き慣れたはずのその声は、妙な反響を共にして健嗣の耳の中をわんわんと駆け回つた。

「行くか

「いくか！」

こころもち興奮した風にスーが声をあげる。それに力を得て、健嗣はゆっくりと玄関の方へと向かつて歩いて、やがて家をあとにした。

真夜中の家々は静かに眠り込んでいる。その中を、雨だけが我がもの顔で風をきつて進んでいく。月も顔を隠さずにはいられないような真つ黒い雲の団体が、健嗣とスーとを見守るよつよつと煽るように煽るよつよつと後を追い越しては追いついていた。

「ねえ」

「なんだ」

住宅街を抜けて、『ジーリー』と音をたてる河を見下ろす土手に着いたくじこじよひやくスーが口を開いた。

「そとつて、いいね」

「そうか？」

「うん。キミの部屋もボクは好きだけれどね。そとは特別だ」

「特別、ねえ」

「特別さ。だつて」

「だつて？」

「判らないかい？雲が動いてる。月が見え隠れする。空気は風に流されて、匂いはどんどん変化していく。そして何より」

スーにしては饒舌なその演説をいつたんそこで切らせて、ためいきとも感嘆ともいえない息を洩らすと、

「キミは太陽に会える」

呟くようにして言った。

「……そうだな」

一文字一文字を吐き出すのと、舌が強張つてこくよみつのを必死でこじらえて、健嗣はやつとの想いをそのまま答えた。やつ四つのが精一杯だった。

杯だった。

そのとき胸の内をつしまいてかき乱していくその気持ちを何と表現したら良いのか。

変わり移ろい行くものに気付かなかつたのは自分だ。単調で退屈な生活をそならしめたのは自分だ。

恥ずかしい。文句を言つぽいの気概もなく、変革を起すぽいの

勇気もなく、すでに終止符を打つほど熱情もない。と、同時に何で自分は幸せなのだろうと思った。明日は今日とはまったく違う日になる。これから先、一日たりとも一秒たりとも同じことなんてない。それに気付けて、なんて幸福だろう。明日を楽しみに出来るなんて、なんて幸運だろう。

「スー」

「けんし」

「ありがとうな」

「何のことだい？」ボクは何もしゃべらないよ。今日だって、歩いているのはおぶつているのは、けんしだよ」

「うん。そうなんだけじゃ」

暗闇に慣れてきた田に飛び込んでくる、黄土色の河の奔流を見つめながら健嗣は、

「おまえがいてくれてよかつたなと思つてさ」

唸るような風と雨音の中で、スーの声はやけにまつまつと健嗣の耳に届いた。

「じうじたしもして」

どういたしまして、だろ。スー。

たくさん話したい」とがかった。昨日とは違う今日のことを。昨日とは違つ雲や風や太陽や田のことを。

「ただいま」

ドアノブに手をかけて笑顔で言いながら押し開く。透明に近い青

緑色に包まれた水のなかでふんわりと笑う少女が、自分を迎えてくれるはずだった。

昨日までは。

「スー？」

震える顔で、それでも名前を呼んでみる。呼びかけてみる。もうここにはいないのだと心のどこかでは痛感したまま。

部屋を満たしていた水はきれいにぱり消えていて、そしてスーの姿もどこにもなかつた。漂うことなどすっかり忘れてしまつた筆記用具に枕に教科書に漫画にパジャマは、部屋の中で鎮座したまま健嗣を見つめる。

「何だよ、それ」

何だよそれ。何なんだ、これは。勝手に現れて、勝手に去つていく。何の答えも残さずに、何の別れのあいさつも残さずに。

どこから来たのか。何のためにここにいたのか。どこへ行つてしまつたのか。人間なのか、人間じゃないのか。家族はいるのか。今までどこでどうやって暮らしてきたのか。

聞きたいことは山ほどあつたのに。教えたいことも山ほどあつたのに。話したいことも聞いて欲しいことも、山ほどあつたのに。

「ぜんぶ、無視かよ」

眉根に深く皺を寄せ、堅く目を閉じて、健嗣が呟いた。

もう、会えないのか？

自分でも未練がましいとは思いつつも、あれから一ヶ月待った。毎日、首をもたげる期待を見て見ぬふりをしながらドアを開けて、ぬるい失望に体をゆだねた。もつ、いない。あの、夢のような奇妙な日々は、本当に終わってしまったんだと。そう納得させるのに一ヶ月もかかったといふことが。

小さい、水槽を買った。あの日スーと一緒に行った土手で拾つてきた石を底に敷き詰めて、水をなみなみと注ぐ。毎日、水を換えよう。濁り行くようなことがないよう。

水槽の壁に自分の手の平をくっつけて、水の中をとおしてそれを見つめてみる。こころなし薄い緑に染まるそれを、ぼんやりとだが真剣に見つめ続けた。それで何が変わるわけでもない。でも、何も変わらないなんて、誰にも保証出来ない。

明日はきっと、今日とは違つてなる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8422d/>

---

雨の日には微笑みを

2010年10月9日14時23分発行